

# 頌栄

No. 123

日本キリスト教団 頌栄教会

〒155-0031

世田谷区北沢 1-42-10

Tel 03-3467-3664

Fax 03-3467-8332



## 神の選ぶ断食（イザヤ書58章）

牧師 清弘 剛生

イザヤ書五十八章が描き出すのは、バビロン捕囚から帰還した人々の姿です。彼らは決して非宗教的な民族ではありませんでした。むしろ捕囚からの解放後、宗教的なことには非常に熱心だったのです。神殿祭儀を盛んに行い、敬虔な業に励む彼らは、外から見ると熱心に求めている人たちに見えたことでしょう。

しかし、彼らの宗教生活には深刻な問題がありました。「内容の伴わない敬虔さ」です。彼らは熱心に「断食」を行いつつ、一方で共に働く人々を追い使い、争いの中に留まり、そして「何故あなたはわたしたちの断食を顧みず、

苦行しても認めてくださらなかったのか」と不満を口にしました。要するに断食しても自分の願いが叶わず、思い通りに進まなかったということでしょう。そのような言葉に、既に彼らの「敬虔さ」の問題がはつきりと現れていたのです。

そんな彼らに主は言われます。「そのようなものがわたしの選ぶ断食であろうか」。神が求めておられるのは、単なる儀式やしきたりではなく、「日々わたしを尋ね求める」ことです。それは礼拝の時だけでなく「毎日」のことです。「毎日」のことに、その人の内にあるものが現れてくるのです。

神の望まれる断食とは、悪による束縛を断ち、虐げられ

た人を解放し、飢えた人にパンを裂き与え、同胞に助けを惜しまないことだ、と主は言われます。かつて捕囚の民であつた彼らを、神は憐れみをもつて赦し、解放してくださいました。断食をするならば、まさにその神の憐れみを思い起こさねばならないのです。神の憐れみに対する応答から、隣人との関わりが新たに始まります。神が憐れみ深くあるように、私たちも憐れみ深くあること。その具体的な歩みこそが、神の望んでおられる断食に他なりません。そこにこそ「そうすれば、あなたの光は曙のように射し出でる」との約束が伴っているのです。

このレントの期間、主の憐れみに応える「毎日」の歩みを、共に祈りつつ求めてまいりたいと願います。

（灰の水曜日礼拝説教より）

## レント・イースターを覚えて

伊藤 眞子

今年は、二月一八日にレントに入ります。主の受難、十字架を覚える時です。

私は、小学生の頃に、教会学校に導かれ、「神さま大好き、イエスさま大好き」と、素直に信じて、悩みなく過ぎてきました。ところが、夫が教会に仕えるようになり、色々な方の苦難を乗り越え信仰を得た証しに接すると、自分の信仰が本物かどうか、「私は、救われているのか・・・」不確かになり悩みました。自分に「罪がある」とは、傲慢にも思っていないかった事に気が付かされました。そこに罪があったのです。しかし、十字架の主が、「そのままの私」を受容し、共に歩んで下さる事を実感し、不安から解放されました。

イースターの日は、「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」と、定められており満月との関係があるので、

日が替わります。

イースターはイエス様が十字架に架けられた日から、三日目と言われていますから、主の受難と十字架を覚える悲壮な思いから、復活の喜びで一変する劇的な展開の日になります。

カレンダーのない初代教会の信仰者たちは、満月を待ちワクワクしながら、イースターを迎えた事でしょう。今回、この思いが、私にも伝わってきました。

六〇年以上になった私の信仰生活で、印象深いイースターの思い出は、クリスマスに洗礼を受けた翌年、早朝六時に鎌倉の海岸で、輪になってイースター早天礼拝を捧げ、薄暗い頭上の雲に朝日が差し込んできた光景、正に希望の光を感じました。

二九年に及ぶ静岡では、毎年、市内にある小高い山の東屋で、イースターの早朝祈禱会を持ちました。祈禱会後に「イースターおめでとうございます♪」と、喜びの声を交わします。

東屋までの百段以上ある階段、山道を手分けして大荷物を運び、準備した

ポットでコーヒーや紅茶を淹れ、朝食代わりにパンや菓子を食べ、大荷物の苦勞も忘れる楽しい恵みの時でした。イースターは、三月下旬から四月中旬のいずれかになりますから、年によって満開の桜の中、花吹雪の中、また葉桜の中、と風景も変わります。

しかし、変わらない駿河湾の海、眼下の町を目にして、明治初期の信仰者が「この町にキリストのご支配が成るように」と祈った事が歴史に残っており、先達の信仰が、脈々と受け継がれて行く事を願いました。

静岡が集まりやすいのは、自転車などで動ける地方都市だからかもしれません。都内に転居して、交通などの利便性の良さを感謝しつつ、逆に、集う事の難しい事も感じました。

コロナ禍で礼拝もままならなかった二〇二〇年、イースターの思いを表した映像の募集があり、清弘牧師が、それを纏め、パソコンで閲覧できるようにして下さったのを思い出します。これも、心に残るイースターでした。

意外と知らない？教会典礼色のお話など

礼拝部会 直宮 直子

皆さんは、聖壇上の聖餐卓や説教台・司式台に掛けられている飾り布の色の意味をご存じでしょうか？「そういえば時々色が変わっているようだけれど、考えたことがなかった」という方も多いのではないのでしょうか。これは、教会暦に従って左表のように分けられ、典礼色と呼ばれています。

そして実は、聖歌隊の冬用ガウンのストール(襟元から背中にかけている布)

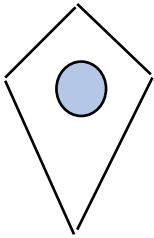
- 待降節(アドベント) : 紫
- 降誕節(12/25-1/6) : 白
- 顕現節(1/7-レント前) : 緑
- 受難節(レント) : 紫
- 復活節(イースター～ペンテコステ前) : 白
- 聖霊降臨節(ペンテコステ～8月最終主日前) : 赤
- 王国節(8月最終主日～アドベント前) : 緑

の色もこれらに合わせて変わっていることをご存じでしたか？(夏用ガウンの着用期間、六ヶ月以外)全然気づかなかつ

たという方も、今後はこれら教会暦にも意識を向けていただけると、礼拝への姿勢もまた少し変わるのではと思います。因みに今が教会暦のどこに当たるかについては、週報の式順ページの左上に毎回記載されていますので、併せてご確認ください。

ところで聖歌隊のストールは赤と白、緑と紫がそれぞれ表裏になっているのですが、以前夏用ガウンがなく、一年中冬用ガウンを使用していた時代の汗染みが白ストールに目立つようになつてしまいました。洗濯は困難で、新品を購入しようにも同様の品は既に販売していないのです。そこで聖歌隊員で洋裁の才に恵まれている中川晶子姉に表裏白のみでの製作をご奉仕でお願いすることになりました。

とはいえ生地選びに始まり(光沢のある厚手の生地)、左図のような特殊な形で(円形部分に頭が入る)全体が表裏縫い合



合わされていますので、長い生地から型紙で生地を切り取り、仮縫

いの上で生地をまず裏側から縫い合わせ、どうやって表に返すのか、かなり苦労されたようです。今時は何とYouTubeの動画でその方法もヒントを得られたようですが、最終的に十八着分を手作業で製作くださいました。(生地選びと仕上げのアイロンがけは、他の聖歌隊員も協力しました。)心から感謝申し上げますと共に、足掛け約五か月の製作期間をかけての中川姉の力作白ストールに、皆様もご注目いただけると幸いです。それぞれに素晴らしい賜物を与えてくださっている神様を心から賛美いたします。



前(胸側)



後ろ(背中側)

## —証し—

## I give You everything

越智 和枝

タイトルは、最近YouTubeで聴いてハマってるワーシップソング「Living Hope」の歌詞の一部、とても感動する曲です。

マンガの設定にでも出て来そうな、人に甘えるばかりで精神的に大人になれない両親の元、典型的な「機能不全家族」の家に生まれた私は、生れからずっと自己肯定感爆下がりの人生でした。

まともな学歴も無く、アーティストになりたくて何とか自分で働いて勉強が出来たものの社会で活躍するのは困難で、三〇歳を前にして、まさに「人生詰んだ」でした。このままどん底で死ぬか、何かを支えにして生きるかと考えた時、「教会へ行きたい」と思ったのです。西洋美術や西洋文学に浸っていた私にとって、教会は親しみのある憧れでした。

そして、神様が導いて下さった頌栄教会で洗礼を受けた所が、私が憧れていた西洋美術のような「荘厳な信仰」は、見事に崩れました。ちょうどその頃、日本のプロテスタントは韓国から火が付いて一大リバイバルブーム、韓国に続け、リバイバル、リバイバル、宣教、宣教で、リバイバル集会だの宣教会だの、熱くも楽しい日々ではありませんでした。

それらの大会のメッセージの中で聞く、「主に全てを捧げる」とはどんなことか？ずつと心に引つかかっていました。

カルトのように全財産を献金するとかは、もちろん違うでしょう。実際に、他の教会の仲間から聞きましたが、給料の大部分を献金し、仕事と教会に行く以外は聖書と祈りで過ごすなどやると、やっぱりメンタル病むそうです。

頌栄教会の中では明確な答えが得られず、教会を出て、いろいろな経験をしてみました。そして、利潤を追求ではなく社会貢献の出来る仕事に就

き、アートで反戦平和や多様性の大切さを発信する展覧会に出展するうち、気付いたことがあります。

そのような様々な活動の中で、「私はどれだけ人のためになることをしたか」では、ただの自分の自慢になっただけです。そうではなく、神様に「全てをお捧げする」というのは、常に「神様と繋がっている」ことではないでしょうか。

ちょうどスマホのアンテナのように、聖霊様というHoly Spiritによって、常に神様との間にアンテナが四本立っているか、アンテナ一本だったり圏外だったりしないか、常に神様の御心のままに動けるか、それが大事なポイントだと思います。I give You everything. 神様に繋がっていきましょう。



# 11月～12月の行事報告

## 秋の公開講演会開催報告

伝道部

2025年11月30日、「世界はどこに向かつていくのか」と題し、秋の公開講演会を開催しました。

緊迫する世界情勢、高まる軍事緊張の中で私たちの進むべき道はどこなのか。教会員のみならず、誰もが関心のあるテーマを、日本経済新聞本社コメンテーターである秋田浩之兄にお話いただきました。

(5) 世界各地での幅広い取材を基にした情報をわかりやすく解説いただき大変好評でした。聴衆は、地域の方も含め50名ほど、活発な質問は講演会後の歓談会でも続くほどでした。中には池ノ上に住んで20年、初めて頌栄教会に足を運んだという方もおられ、歓談会で清弘牧師も含め教会員との交わりを持たれたことは大きな恵みでした。

今回は会場を頌栄教会とする講演会と銘打って地域掲示板、新聞折り込みで告知しましたが、先行きが注目される2026年、今後もみなさんが関心あるテーマで同様な試みを行うことも計画していきたいと考えています。



## クリスマス礼拝・祝会

### イブ礼拝報告

猪狩 順子

十二月二十一日は、クリスマス礼拝でした。前日から曇り時々雨の予報でしたが、最高気温は十八度と季節外れの暖かさになり、男性三十三名、女性八十三名の、合わせて百十六名の方々が出席でした。新来会者は三名。そのうちの一人は、保護犬と共に旅するアメリカ人男性でした。



礼拝の最初に、毎年恒例になった小さな子ども達による四本のキャンドルへの点火。『主を待ち望むアドベント』を大人達と一緒に歌う中、緊張した面持ちで慎重に種火を運ぶ子ども達。大役を果たし嬉しそうにしている様子に、年齢は関係なく神様の御前に

招かれている喜びが満ちていることを実感しました。清弘牧師より「真に幸いな人とは」と題したクリスマスのメッセージを頂きました。

礼拝に引き続き、階下ホールで祝会が催されました。九十名の方が出席。中野みどり姉が前日から心を込めて、玉ねぎと人参のコンソメスープを準備して下さり、サンドイッチやお菓子をみかんを美味しく頂きながら、歓談の時を持ちました。



司会は、大迫桜子姉と金子宏美姉が担当。イースターで洗礼を受けられた厚東佐知子姉、五月に転入会された三嶋幸彦兄の紹介に続き、伊東理恵子姉による、絵本朗読「クリスマスの

ほしが光ったよ」が始まるとその声の迫力に、子どもたちも大人達も聴き入っていました。宮内兄による独唱「くしき星よ」に続き、聖歌隊による「さやかに星はきらめき」を樋口玲子姉の伴奏で捧げられ、閉会の祈りで散会しました。



三日後の二十四日は、十九時よりクリスマスイブ礼拝でした。男性十五名、女性三十七名の、合わせて五十二名のうち、新来会者が七名、教会員以外で久しぶりの方が十六名もいらつしや

いました。聖書を何人かの方でリリースに朗読しながら、祈りの歌を交互に歌うイブ礼拝。初めて参加された方からは「静かでもとても良かった」というお声がありました。

その日に捧げられた献金は、全て對外献金として様々な団体に寄付されました。私達の事だけでなく、イエス様の様に他者を想い祈る大切な機会が与えられていることを心に刻みつつ、これからもできる限り多くの奉仕に参加したいと思えます。





いつも教会学校のためにお祈りくださり、ありがとうございます。

アドベントの期間、小学生たちは、礼拝の始めにアドベントクラントの点火の奉仕を行いました。「主を待ち望むアドヴェント」の賛美歌と共に、ろうそくを手に子どもたちが礼拝堂に入ってくる時間は、奉仕する子どもたちだけでなく、大人にとっても喜びのひと時となりました。



12月21日のクリスマス礼拝・祝会の後、午後2時から、「こどもクリスマス」を行いました。幼児から中高生までの子どもたちが聖書の朗読と賛美によってクリスマスの物語をつむぎました。

この日のために、子どもたちは8月よりクリスマス学の学びと準備を進めてまいりました。今年度は子ども的人数が少ないなどの理由から、今までのように子どもたちが劇で役を演じるという形でのページェントは致しませんでした。今までのように「子どもと大人が共に神さまにささげる」とを大切にしました。

今年度は特に「神さまにささげるものを心を込めて準備すること」と共に「クリスマスのメッセージを子どもたちに伝えること」を大切にしました。時間をかけながら丁寧に準備したことと、子どもたちにとってクリスマスの意味をよく理解できる機会となり、イエスさまをより身近に感じることができたことを感謝しています。

1月に入ってからからの礼拝では、大きな風の音に負けない、子どもたちの大きな賛美の歌声がとても印象的でした。小学生も中高生も礼拝にも各クラスにも主体的に参加しています。これからも子どもたちの信仰が成長していくように、どうぞお祈りください。また、幼児連れの親子が来会できるように、また、新しい子どもたちが与えられるようにもお祈りください。

成人クラスも参加者が増え、豊かな学びと交わりのひと時となっています。ぜひご参加ください。



## 天に召された方

故松田勇彦兄 一〇二歳

(二〇二六年一月六日召天)

松田勇彦兄は、一九二三年一月十日、台湾にお生まれになり、大学卒業まで台湾で過ごされました。終戦後に東京に引き上げられた後、外資系商社勤務時代に奥様の智恵子さんと出会われ、ご結婚。ご家庭は二人のお子様に恵まれました。頌栄教会には、お母様が所属されていた柏木教会の紹介でお子様方と共に通われるようになり、一九七四年のクリスマス、五十一歳の時に「長女の牧子さんと共に洗礼を受けられました。ご自身の信仰については「考え求めて得たものではなく、神様のお招きと、母が五十一年間祈り続けてくれたおかげ」と言っておられました。誰に対しても丁寧で優しいジェントルマンで、世代を問わず多くの人から慕われていました。そして、去る一月六日、この世の務めを全うし、天に召されました。ご遺族の上に深い慰めがありますように。

## 故石川秀姉 八十五歳

(二〇二六年二月一日召天)

石川秀姉は、一九四〇年六月十四日、和歌山市にて藤田家の三女としてお生まれになりました。熱心なクリスチヤンであったご両親の祈りのうちに育まれ、十七歳のイースターに和歌山教会で洗礼を受けられました。高校卒業後、上京され東京女子大短大部に進学。ご卒業後は、郷里の中学校で体育の教師として勤められました。その頃、教会において石川靖児さんと出会われ、一九六二年にご結婚。ご家庭では四人のお子様にも恵まれました。ご主人の転勤に伴い、大阪、北海道、東京と各地を移り住まれましたが、どのような土地にあっても地元教会に連なり、日々の生活を大切にしながら、温かなご家庭を築いていかれました。そして、主と共に歩む信仰の生涯を全うし、去る二月一日、愛する主のみもとに召されました。ご遺族の上に深い慰めがありますように。



4月5日(日)

主のご復活を共に祝いましょう!

10:30 イースター礼拝〔聖餐式〕・祝会

18:00 イースター 夕礼拝〔聖餐式〕

